

# 経済論壇から



東京大学教授 松井 彰彦

湿気と熱気が身体にまとわりつくような夏の朝。人を詰め込むために座席が折り畳まれ、化粧と汗の臭いでむせかえる満員電車で揺られながら、八十年のときを超えて現代に蘇った小林多喜二の小説『蟹工船』で船倉にすし詰めされた労働者たちの光景がふと頭をよぎった。主流の立場で問題を論じることが常の社会や論壇は、かれらのような流れから取り残された人々の視点を意図的ではないにせよ、限りなく無視し続けてきたのではないかと……と。

先日の秋葉原の無差別殺傷事件では、容疑者が派遣労働者で世の中を恨む言葉をブログなどに残していたことから、格差社会が生み出した問題だと大きく騒がれた。

金沢大学教授の仲正昌樹氏(諸君9月号)は、事件の原因が格差問題にあると考えるのが、あたかも知識人の良心であるかのごとく決めつけるのは、安易にすぎると述べるが、東京大学教授の姜尚中氏(日経WOMAN8月号)が指摘するように、容疑者が示していた勝ち組への強い怨念に半ば共感のような心情を抱く若者が増えてきているのは間違いないようだ。

参考になるのがフリーライターの赤木智弘氏(ロスジェネ創



姜尚中氏



樋口恵子氏



鷺田清一氏



柳田邦男氏

えようとすると「暴力的な手段が付随してくるのは当たり前なこと」という。同氏は、そもそも人を踏みつけにしておいて、今度は逆に踏みつけられた

## 「蟹工船」ブームの背景を探る

側から反撃をくらうことを考えていないとすれば、あまりに考えが甘いと述べている。

それに対し、2ちゃんねるの管理人の西村博之氏(M9 vol.2)は、「ダメな人ってのは、何かしら重大な欠点を抱えているんだよ」と指摘。本当に社会を変革したいのであれば社会に属しながら、「ここはおかしいから変えよう、変えてくれ」と言わないと説得力がないじゃん」と述べ、不満を格差社会のせいにし、怒りだけをぶつけようとする若者の姿勢を甘え以外の何ものでもないとして切り捨てる。

ラブピースクラブ代表の北原みり氏(世界8月号)によれば、秋葉原の事件で派遣問題の歪みが改めてクローズアップされたが、見方を変えれば、女性がこれまで味わってきた悔しさを、若い男性たちが味わっているにすぎない。「女だから派遣」は無視されてきた問題なのに、「男なのに派遣」だからこそ大問題になる」という構造そのものが問われるべきだという指摘を私たちは真剣に受け止めねばならないだろう。

高齢社会をよくする女性の会理事長の樋口恵子氏(福祉労働夏号)は、「女だから派遣」ところか、介護の分野では、女たち・嫁たちが無視され無料で孤獨な仕事を押し付けられてきた点を問題視するとともに、ようやく社会化されてきた介護労働

の担い手が「社会の『嫁』化していく危険」を指摘し、早急な対策を訴えている。大事なのは、同じ事件や現象を見ても立場や視点によってその解釈が大きく異なってくるという事実である。もっとも、そもそも社会的な視点自体に欠ける人が増えていることを懸念する声もある。

大阪大学学長の鷺田清一氏(論座9月号)は、秋葉原の暴力的犯行そのものだけではなく、犯行現場で血を流している人を助けようともせず、何の煩悶もなく、携帯電話で写真を撮るうと群がっている人たちに「耐え難い気分」になったと述べ、人々から当事者意識が薄れてきていることを危惧する。同氏は当事者意識の希薄化が公平無私な第三者の視点につながるという、現状肯定的な解釈はまったくの幻想であり、偏った見方を避けるためには、「現場の中(一人称)と現場の外(三人称)のあいだを行き来し、自分の視点を多重化する作業」が必要であると訴えている。

## 視点の多重化重要に

作家の柳田邦男氏(現代9月号)も二人称と三人称の間を行き来する。五人称の視点の大切さを説いている。同氏は少年による殺人事件を例に、相談を受けた警察官や学校長が被害者の視点で状況を見ようとしたならば事件は起こらなかったであろうと指摘。二人称の視点を持ってなかった警察官や学校長らに対して憤りを隠さない。

析の出発点とし、それを積み上げることでも三人称的な結論を導き出すゲーム理論が改めて注目を集めている。東京大学教授の松島斉氏(現代思想8月号)が述べるように、ゲーム理論の出発点は「相手の立場で考える」ことにほかならないからである。逆に、その出発点を崩すこともゲーム理論の視野に入ってきた。蟹工船の監督が労働者の立場を無視したように、経済社会の主流にいる人々は、そこからはみ出した人々の立場を無視しがちである。ゲーム理論は、そのような状況下で、相手に対する謬見や偏見が生まれるプロセスにもメスを入れつつある。

私たちは、自分の境遇や生い立ちに縛られたまま、ものを見る囚人である。そのような囚人が自分の視点でもの見ようとするれば、独りよがりになるし、それが嫌で自分の視点を放棄してしまえば、問題意識すら持たない人間になってしまうかねない。

それでもなお、いや、それだからこそ、様々な声に耳を傾け、相手の立場で考える努力を怠ってはならない。そして、それを通して囚われ人なりのものの方を鍛えていかななくてはならないのである。

蟹工船を護衛していた駆逐艦の将兵は、待遇改善を求めた労働者に銃口を向け、首謀者を連行してしまう。国家が一部の既得権者の手先となっているのではないかという不信感が『蟹工船』ブームの根底にあるとしたら、私たちにとって必要なことは、流れに取り残された人々の声を汲みあげる努力を続けていくことではないか。